卒業論文

公営競技の持つ社会的意義

2014 年度入学

九州大学　文学部　人文学科　人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専門分野

2018 年 1 月　提出

要約

本論文の目的は、公営競技を生活者の視点から捉えることである。公営競技は戦後に自治体の財政への貢献という形で誕生した。そのためこれまでは財政貢献という経済的側面から語られることが多かった。本論文ではその公営競技の利用者、あるいはそこで働く人などにとっての意味を中心とする。公営競技は、現在の日本では唯一合法的にギャンブルをする場という大きな特徴を持っている。そのためここではギャンブルという行為の意味も大きな柱として考える。

先行研究ではギャンブルの性質その効能についてと社会との関わり、そしてギャンブルが日本の歴史上どのような存在であったかについてまとめた。また、公営競技の意義についても触れた。そのうえで、防府競輪場で参与観察とインタビュー調査を行なった。防府競輪は近年では自治体の財政への繰り入れはできていない。そのためその存在には生活者にとっての意義が濃く出ていると考えられる。競輪場での観察は利用者の行動の特性や、場内がどのような場所であるかを中心に捉えた。観察や利用者へのインタビューからではギャンブルを楽しむ人たちの多様な形を見出した。また、観察から常連の人たちの特徴的な行動が伺えた。市競輪局や JKA の職員からのインタビューからは、競技場を雇用の場として大きく捉えていることが特徴的であった。

ギャンブルは、非日常の世界で日常とゆるやかにつながるゲームである。ギャンブルは普段の生活からは得られない生きる実感や刺激などを得るというように、参加者にとって多様な形で意味をもたらす。公営競技場は利用者にとって、現実から脱することができる場であり、心地よい居場所になっている。また、それは雇用の場として利用者以外にも意味を持ち、地域と隔離されようとされながらも実際は何らかの形で地域と関わっている。

賭けへの欲求は常に人々の中にあり、賭けという遊び、ゲームはどの時代にも存在した。ギャンブルは普段の生活で満たされない欲求を満たしてくれものであり、ギャンブルへの欲求は「負からのエネルギー」と言える。公営競技はその賭けへの欲求を公営という責任のもとで受け止め、「負からのエネルギー」を、地域への貢献など社会における正の機能へと変換する役目を果たしてきたと見える。また、利用者にとって居場所として機能し、そこは日常の枠組みに縛られない心地よい関係を築くことができる。財政への貢献は公営競技の存在意義として捉えられたが、それは一つの可能性にすぎない。公営競技は様々な形で社会と関わり、貢献する可能性を持つ存在である。

目次

1　本論文の背景と目的 1
1.1　問題の所在 1
1.2　賭博の定義 2
1.3　公営競技の定義と仕組み 2
2　先行研究 4
2.1　ギャンブルと公営競技の歴史 4
2.1.1　日本におけるギャンブルの歴史――紀田順一郎の研究から――
2.1.2　公営競技の歴史
2.2　ギャンブル行為に関する先行研究 8
2.2.1　社会とギャンブルの結びつき
2.2.2　遊びとしてのギャンブル
2.2.3　ギャンブルの動機と効能
2.2.4　ギャンブル禁止論
2.3　公営競技に関する先行研究 15
2.3.1　公営競技の意義
2.3.2　公営競技場に関する研究
3　公営競技場における実態調査 17
3.1　調査概要 17
3.2　防府競輪について 17
3.3　参与観察から見た特徴 20
3.3.1　競技場内の特性
3.3.2　利用者の行動
3.3.3　利用者の関係性
3.3.4　送迎バスでの様子
3.4　聞き取り調査の分析 23
3.4.1　利用者への聞き取り

3.4.2　防府市競輪局職員 B への聞き取り
3.4.3　防府市競輪局職員 C への聞き取り
3.4.4　JKA 職員の方への聞き取り
4　考察 27
4.1　ギャンブルについて 27
4.1.1　遊びとゲームのギャンブル
4.1.2　非日常の世界で日常とつながるギャンブル
4.1.3　瞬間的な興奮を求める賭博者
4.1.4　自分だけの追体験を求める賭博者
4.1.5　ギャンブルの呪術的効果
4.1.6　賭けにおける金銭
4.1.7　ギャンブルについてのまとめ
4.2　公営競技に関する分析 33
4.2.1　日常を忘れられる場所
4.2.2　ゆるやかなつながりと居場所
4.2.3　雇用の場
4.2.4　公営競技と地域
4.3　考察の課題――これからのギャンブルと公営競技―― 37
5　公営競技の社会的意義 41
5.1　利用者にとっての公営競技 41
5.1.1　賭けの場としての公営競技
5.1.2　居場所になる公営競技場
5.2　地域にとっての公営競技 43
5.3　公営競技の可能性 43
おわりに 45
[注] 46
[文献] 46